

忠霊塔の歩み

— 平和への願い —

令和七年八月発行

巻頭言

「忠霊塔の記憶と継承」遺族の願い

富士吉田市遺族会会長 桑原良訓



戦後八〇年という大きな節目を迎えるにあたり、私たち富士吉田市遺族会は、本冊子を発行していただけることとなりました。忠霊塔の歩みと、そこに込められた平和への願いを改めてお伝えするためです。時代と共に戦争の記憶は薄れつつあります。だからこそ、忠霊塔が語りかけてくる静かな声に耳を傾け、歴史を振り返ることの大切さを痛感しております。

忠霊塔は昭和三十四年に起工され、三年の歳月をかけて完成した五重塔です。市内から出征し、命を落とされた一〇五五名の戦没者を慰霊する為に建立されました。その背後には、多くの遺族や市民の皆さまの切なる願いと尽力がありました。建設地の選定や資金調達、設計から施工に至るまで、苦渋の決断と幾多の困難がありました。が、地域の有志たちは「失われた命を悼み、二度と過ちを繰り返さない」との願いを胸に、力を合わせてこの塔を完成させたのです。

私たち遺族会の会員の多くは、父や兄弟、夫や息子など、かけがえのない存在を戦争で喪いました。戦地

から届いた短い手紙、帰らぬ人となった知らせ、遺影を前に流した涙。また再会を果たせぬまま人生を終えた友もいます。戦争による深い悲しみと喪失の記憶は、今なお私たちの胸に刻まれ決して消えることはありません。

忠霊塔は、このような遺族の痛みと向き合い、亡き人々への哀悼と平和への祈りの象徴として築かれました。援護会、建設委員会、遺族会、地元有志、そして多くの市民の願いによって建てられたこの塔は、「地域の心」であり、「願いの結晶」として在り続けております。それは、単なる「建築物」ではないのです。近年、五重塔と富士山、桜が織りなす風景は、日本の美の象徴として世界的に注目を集めています。それは私たちにとっても喜ばしいことです。しかし一方で忠霊塔が記念写真のスポットとしてだけの認識であることには懸念があります。この地に込められた深い意味に、少しでも思いを寄せていただけたらと願っております。

毎年八月十四日から十六日、忠霊塔の内部は一般公開されます。訪れる方々は、塔内に安置された位牌に手を合わせ、亡き人々への敬意と感謝の念を表してください。この三日間は、遺族にとっても特別な時間です。心の奥にしまってきた思いを語り、再び亡き家

族と向き合うかけがえのない時間であり、願いを次世代に手渡す責任を新たにする機会でもあります。

この期間はまた、忠霊塔の本来の意義をお伝えする貴重な機会です。塔はなぜ建てられたのか。お位牌がご安置されている戦没者の方々は、どのような思いで戦地に赴き、帰らぬ人となったのか。お国のために死ぬことこそが正義であると教えこまれ、立ち止まって考えることすら許されず、命を失った人々の悔しさは計り知れません。

いま世界では争いが絶えず、国内でも人々の意識は変化しています。だからこそ、戦争の罪深さと愚かさを語り継ぐことが、私たちに課せられた責務でありましょう。平和は与えられるものではなく、守り育てるものです。いかに尊いものであるかを心に刻み、今という時代を誠実に生きていただきたいと願っております。

こうした声なき叫びを後世に伝え続けるからこそ、愛する人々を奪われた私たち遺族会の使命であり、責任であると信じております。私たちが何もしなければ、戦争の記憶はやがて風化し



工事中の忠霊塔(昭和34年)

忘れ去られてしまうでしょう。まずは私たち自身が過去と向き合い、二度と同じ過ちを繰り返さぬよう決意を新たにし、恒久の平和を願い続けてまいります。本冊子が、その一助となれば幸いです。結びにあたり、発行に際しご尽力を賜りました関係各位に、心より感謝を申し上げます。

二〇二五（令和七）年八月

先人たちの想いを未来へ

富士吉田市長 堀内 茂



太平洋戦争終結八十年という節目の年を迎え、富士吉田市戦没者慰霊塔（以下、忠霊塔）のもと、安らかに眠りになる千五十五柱の英霊に対し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

先の大戦で、多くの尊い命が失われ、国土は焦土と化し、我が国は未曾有の悲劇を経験しました。しかしその後、先人たちは筆舌に尽くしがたい苦難を乗り越え、終戦と同時に、平和への力強い一步を踏み出し、今の私たち、そして富士吉田市があります。

戦争の記憶は、時が経つにつれて否応なく薄れてしましますが、私たちは、決してあの悲劇を忘れてはならず、記憶の風化に抗わなければなりません。その想いの結晶が忠霊塔であり、その建立の目的は、亡くなられた方々の御霊を慰めるとともに、戦争の悲惨さを後世に伝え、平和の尊さを語り継ぐためであります。

かつては、残されたご遺族が英霊を悼み、

地元の人達が花見に憩い、あるいは富士の眺望を楽しむ等、市民の来訪が中心の静かな場でありました。それが近年、日本を象徴する写真が撮れる場所としてSNS等で発信され、国内外からの観光客が中心となっており、慰霊塔という本来の目的に気付かれない方々がほとんどです。

戦後八十年という節目を機に、改めて平和への誓いを新たにし、二度と戦争の惨禍を繰り返さないためにも、歴史から学び、平和への努力を弛まなく続けることが、先人が築いてくださった平和な時代を生きる私たちに課せられた使命であり、その意味で「忠霊塔の歩み」の刊行は大きな役割を果たすものと考えます。

本誌により、忠霊塔に込められた想いを皆で共有し、平和への意識を一層深めてくださることを心から願い、ご挨拶に代えさせていただきます。



継承されていく想い

富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合組合長

秋山 隆信



戦後八〇年「忠霊塔の歩み」発刊によせて一言ご挨拶申し上げます。

富士吉田市戦没者慰霊塔（通称…忠霊塔）は、明治（一八六八年）以降の日本国として参戦した戦役（日清、日露、第一次世界大戦及び太平洋戦争）において戦没した市内出身者九六〇柱（現在一〇五五柱）を合祀するため、市の援護会が中心となり、昭和三四年四月に起工し三年間の工事期間を経て昭和三七年四月に完成し、現在に至ります。

以来六十余年、富士の麓にそびえ立つその姿は、地域の人々の祈りの象徴として、平和の大切さを静かに語りかけています。

富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合は、入会御料地や旧十一ヶ村の共有地を統制管理するために明治時代に設立され、設立当初から現在、未来に渡るまで地域の入会住民の「幸せ」「富」を創出することが任務の根底にあります。

先人たちが残してくれた富士山北面の入会財産を次の世代につないでいくことが本組合

の使命であると同時に、今後も永続的に入会権の継承を行っていくことが我々の課題であります。

忠霊塔の建設に当たっては、旧下吉田町在郷軍人会が所管していた軍人林十町歩を本組合が三〇〇万円で購入することとし、その三〇〇万円を基礎資金として本日の忠霊塔が建設されたところであります。

忠霊塔に安置されている一〇五五柱の位牌には、それぞれに家族があり、人生がありました。その重みを私たちは決して忘れてはならず、次代を担う子どもたちにも、語り継いでいくことが必要であり、永続的に継承していかなければならないという点において、忠霊塔の存在意義も本組合の使命と同様であると考えております。

結びに、戦没者の皆様の安らかなご冥福を心よりお祈り申し上げるとともに、この忠霊塔がこれからも地域の平和と祈りの象徴として末永く守られていくことを願い、挨拶とさせていただきます。



忠霊塔の歩み略年表

— 日本 の 出来事 —
— 忠霊塔 の 出来事 —

1914
第一次世界大戦開戦
大日本帝国は連合国側で参戦

1904
日露戦争開戦
旅順攻囲戦や日本海海戦

1894
日清戦争開戦
豊島沖海戦



新倉山より

1941
太平洋戦争開戦
日本がマレー半島と
ハワイ真珠湾を奇襲攻撃



歩兵第49連隊遠山中隊

1959
忠霊塔起工
多くの市民からの援助を
仰ぎ予算一千万円を計上



忠霊塔工事の様子

1918
第一次世界大戦終戦

1905
日露戦争終戦
ポーツマス条約締結

1895
日清戦争終戦
三国干渉により遼東半島を清国に返還

1962
忠霊塔竣工
三年の期間を費やして完成

1952
「戦傷病者戦没者遺族等援護法」施行

援護会と建設委員会の発足

1945
太平洋戦争終戦
8月15日玉音放送で戦争終結
が伝えられる



2018
樹勢回復工事開始

2016
初の「新倉山浅間公園
桜まつり」が開催

2014
写真共有サイト500PX
にて記事が掲載

1978
「忠霊塔の由来」発行



咲くや姫階段

2025 現在
戦後80年
太平洋戦争終戦80年

2022
展望デッキ拡張工事完了

2015
「ミシュラン・グリーン
ンガイド・ジャポン」
の表紙を飾る
展望デッキを整備

2003
階段の愛称「咲くや姫
階段」制定



「忠霊塔の歩み」

平和への願い

忠霊塔は山梨県富士吉田市の新倉山（標高八五〇メートル）中腹にあり、一九六二年に建設されました。富士山の麗姿と、市街が一望できる市内屈指の景観地です。同所から仰ぐ富士山の風景写真は、海外の教科書などで、「日本の象徴」として紹介されています。

新倉山浅間公園の敷地面積は四万二九二五平方メートル。公園入り口からは三九八段の石段があり、総延長は約二〇〇メートル。約九十台収容可能な駐車場から石段か遊歩道を十分ほど歩くと、公園の中心である忠霊塔（戦没者慰霊塔）に辿り着きます。

忠霊塔（正式名称…富士吉田市戦没者慰霊塔）は、明治以降の戦争で戦没された富士吉田市出身者を追悼するために建てられました。その背景には、地域の援護会や市民の深い願いと努力がありました。

1. 戦没者慰霊の必要性と地域の願い

明治以降、日本は日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、太平洋戦争といった多くの戦争に関与し、多くの兵士が命を落としました。富士吉田市からも多くの若者が出征し、戦地で命を落とされました。戦後、これらの戦没者を追悼し、平和への願いを形にするための施設が求められていました。

2. 援護会の結成と建設委員会の設立

戦後の混乱の中、太平洋戦争での戦傷病者や戦没者遺族の窮状を救うべく、太平洋戦争の引揚軍人であった大正寺遠山正欽住職を会長に、奥脇規矩男氏、宮下茂泰氏、渡辺儀作氏、渡辺七明氏を理事とした援護会（山梨県南都留郡戦傷病者遺族等援護連盟）が結成されました。同時に不幸にも戦死された方々の為の慰霊塔を建立して、帰らぬ人となった戦友を追悼すべく、地域の有志や遺族会、在郷軍人会などにより、戦没者慰霊のための塔を建立する計画が立ち上がりました。山梨県戦傷病者遺族等援護連盟の堀内一雄会長（富士山

堀内一雄（1893年-1985年）

富士山麓電気鉄道株式会社（現富士急行）社長。第9師団参謀・陸軍少佐、満洲国陸軍少将を歴任。衆議院議員（5期）。勲等は勲一等瑞宝章。戦後は山梨県遺族会会長として尽力。

遠山正欽（1902年-1968年）

浄土真宗本願寺派大正寺第16世住職。陸軍最終階級は歩兵大尉（歩兵第49連隊所属）。戦後は南都留郡援護会会長として尽力。

麓電気鉄道株式会社（現富士急行）社長）の支援

を仰ぎながら、一九五八年八月十二日には、富士吉田市希代圭司市長を委員長とする「富士吉田市慰霊塔建設委員会」が設立されました。この委員会は援護会の主導のもと、戦没者慰霊塔の建設を具体的に進めるための組織でした。



遠山正欽住職



希代圭司市長

3. 建設地の選定

当初、忠霊塔の建設地は小舟山が候補地とされ、整地や地鎮祭も行われました。しかし、地質調査の結果、地盤が軟弱で高層建築には不適切であることが判明し、現在の新倉山中腹に変更されました。この場所は、富士山を一望できる絶好の景観地であり、追悼の場としてふさわしいと判断されました。

4. 資金調達と市民の協力

建設資金については、旧下吉田町在郷軍人会が所管していた軍人林十町歩を売却して基金とする案を、当時の分会長遠山勇治氏に提示して協力を要請しました。その後、存命の歴代分会長の渡辺清孝氏、小林信義氏、渡辺武造氏、田辺貞治氏、渡辺治郎吉氏と協議し承諾を得ます。早速、富士吉田市二ヶ村恩賜林組合長大森直光氏に事情を訴え、対応を懇請しましたところ価格も度外視しての承諾を得ることとなりました。その収益である三百万円を基礎資金とし、さらに、不足する資金は市民からの浄財によって賄われました。このように、地域全体が一体となって建設資金を集めたことは、忠霊塔が市民の願いと努力の結晶であることを示しています。

5. 建設の過程と完成

一九五九年（昭和三十四年）四月に起工し、三年の歳月をかけて一九六二年（昭和三十七年）四月に竣工しました。忠霊塔は、高さ一九、五メートルの鉄筋コンクリート造りの五重塔で、朱塗り

小舟山（おぶねやま）

大正寺山門前にあった小高い丘陵。昭和30年代の中央自動車道建設に伴う土砂採取により、小舟山そのものがほぼ消滅した。現在は宅地となっている。

希代圭司

富士吉田市第2代市長。

1955年（昭和30年）から1959年（昭和34年）一期4年を務める。





忠霊塔工事の様子（昭和 34 年）

の外観が特徴です。設計にあたっては、東京上野の寛永寺、芝増上寺、長野の善光寺の各建造物、資料などから検討しました。その結果、大阪の四天王寺の五重塔をモデルとし、その何分の一かで設計し予算一千万円を計上しました。施工業者には、甲府市の引き揚げ軍人であり、この専門職であった高石工務店を指定し、三年の期間を費やして完成することとなりました。現在、塔内には、太平洋戦争他、日清、日露、第一次大戦で戦死された一〇五五柱の位牌が安置されています。

6. 慰霊塔の意義と地域社会

忠霊塔は、戦没者の追悼と平和への願いを込めた象徴的な存在として、地域社会に深く根付いていきます。現在、毎年終戦記念日に合わせて八月十四日、十五日、十六日の三日間、忠霊塔の内部が一般に公開されます。太平洋戦争終戦十年毎の九月には、忠霊塔前で富士吉田仏教会が戦没者追悼法要を行い、多くの人々が参拝して先人たちを偲んでおります。忠霊塔の建立は、地域の歴史や平和への願いを後世に伝える重要な役割を果たしています。また、周辺は自然豊かな散策路としても整備され、地元の小学生が授業の一環で忠霊塔を訪れたり、市民の憩いと健康づくりの場としても親しまれています。

7. 国際的な評価と観光地としての発展

この景観は日本人にとつては精神的な郷愁を呼び起こす「日本の原風景」であり、訪れる者に静かな感動をもたらします。これまでは地元民や一部の旅行者の間で知られる程度でしたが、二〇一四年に世界的写真共有サイト 500PX が発表した記事「死

整備も進められました。しかし観光客の急増によりマナーや環境問題も顕在化したため、市では地域住民や観光業者と協力し、取り組みをはじめます。

8. 新倉山浅間公園としての整備

近年、新倉山浅間公園としての整備も進められました。公園内には三九八段の石段「咲くや姫階段」や遊歩道、東屋、トイレなどが整備され、訪れる人々の憩いの場となっています。また、約六五〇本のソメイヨシノが植えられ、春には桜と富士山、忠霊塔の共演が楽しめます。二〇一五年、桜や紅葉の時期には大勢の人が忠霊塔背後の山の斜面に集まり危険性が指摘されていたことから、市が観光客の安全を守ろうと、柵などを取り付けた展望デッキを整備しました。その後、桜の見頃の時期には写真を撮影するために行列ができるほど混雑していたため、二〇二一年七月から再整備（拡張工事）を進め、二〇二二年一月中旬に工事が完了しました。同年二月一日に一般開放。新たなデッキは広さ一二六平方メートルで、従来の五倍に。高さを変えて景色を楽しめるよう三〜四段の段差を付けました。景観を損ねない

木花開耶姫（このはなさくやひめ）

日本神話に登場する女神で、富士山の御祭神として祀られ、火の神、安産の神として知られています。

500px

500PX

世界各国からハイアマチュアやプロフェッショナルの写真家が集まる投稿サイト。当時、写真共有サイトにおけるアクティブユーザー数が世界一と言われていた。



小学生の課外授業

地域の子ども達が課外授業で訪れる場に。



仏塔（五重塔）

仏教寺院で建てられる五重の屋根を持つ塔で、仏陀の遺骨を納めるストゥーパ（ドーム型の仏塔）が起源。仏教が中国に伝わると現在の様な三重塔や五重塔の形に変化。

よう茶系色にし、材質は再生木材を採用して環境に配慮。再整備には、インターネットを通じて資金を募る「ふるさと納税クラウドファンディング」で全国 の八六五二人から寄せられた寄付金の一部を活用しております。また、桜の老木化に対応するため、二〇一八年からは樹勢回復の取り組みが行われ、二〇一九年には富士急行が一〇〇万円を寄付するなど地域全体での取り組みが進められています。

9. 観光地としてのオーバーツーリズムと課題への対応

来訪者の急増により、近隣住民の生活に影響が出るなど、オーバーツーリズムが課題となっています。二〇二四年には年間来訪者数が約一五二万人に達し私有地への無断立ち入りや違法駐車、近隣地区の渋滞問題が顕在化。対策として市は二〇二五年四月より駐車場の有料化を実施し、交通誘導員の増員や、桜まつり期間中にはシャトルバスの導入など多方面からの対応を進めています。また、地元では過度な報道による観光過熱を避けるため、メディアに対し「景観の過剰な紹介を控え

てほしい」と自粛要請も行いました。観光地として国内外から多くの人々が訪れる一方で、地域との調和が難しくなっており、「受益者負担」的な施策が実施されています。オーバーツーリズム対策（駐車場有料化、交通制限、報道抑制）は多少の効果を発揮していますが、今後も量的拡大だけでなく質の高い観光を志向する施策が求められています。

10. 「訪れること」と「平和を願うこと」の交差点

忠霊塔には、毎年多くの観光客が訪れています。特に春には、桜と五重塔、そして富士山が一つの風景として重なり、「日本の原風景」として知られるようになりました。そのため、多くの人が美しい写真を撮ろうと、この場所に足を運びます。けれどもこの忠霊塔は、ただの景勝地ではありません。ここには、戦争で命を落とされた多くの人々を悼む気持ちと、平和な時代を願う思いが込められています。つまり、美しい風景の奥には、深い歴史と大切な記憶が存在しているのです。訪れる人にはぜひ、「なぜこの場所に五重塔があるのか」「なぜ富士山とと

もに並ぶ風景が大切にされているのか」を考えてもらいたいと思います。それは、戦争の記憶を忘れず平和な社会を守り続けようという、地域の人々の願いが背景にあるからです。

忠霊塔は、写真におさめるだけのスポットではなく「平和の大切さに気づくきっかけ」となる場所です。ここを訪れることが過去を知り、今を見つめ、未来を考える時間になることを願っています。観光とともに、平和への思いにも触れていただけたなら忠霊塔を訪れる意味はさらに深まるはず です。

11. 忠霊塔を未来へ語り継ぐ

新倉山の中腹に建つ忠霊塔は、戦没者を追悼し、平和を願う地域の思いをかたちにした象徴として、建立されました。その背景には、戦争によつて多くの命が失われた現実を忘れず、二度と同じ過ちを繰り返さないという強い決意がありました。援護会や遺族会、地域の有志が力を合わせ、塔の建立に尽力した歴史は、今もこの地に息づいています。

しかし、戦争を体験した世代が少なくなる現代において、忠霊塔の持つ意味が十分に知られないまま

美しい風景としての記憶だけで終わってしまう懸念もあります。忠霊塔があるこの場所は、ただの「映える」撮影スポットではなく、命の重さや歴史の現実と向き合い、平和の大切さを考えるきっかけとなる場であつて欲しいと願います。

また私たちは今、過去から託された願いを受け止め、それを次の世代へと繋ぐ責任を負っています。そのためには、学校や地域での平和学習の場としての活用、観光を通じた歴史教育、あらゆる手段を用いて忠霊塔の意義を伝える努力が必要です。訪れる人々が、この地に込められた思いを知ること、何を守るべきかを自ら考えるきっかけになればと願います。

忠霊塔は、戦争という過去を静かに語り継ぎ、平和への願いを未来へとつなぐ場です。美しい風景の背後にある歴史を見つめ直し、そこで得た気づきを次の世代へ手渡していくことが、私たちに求められている使命ではないでしょうか。

令和七年八月

「忠霊塔の歩み」平和への願い



新倉山浅間公園の来訪者数

新倉山浅間公園への来訪者数は、近年増加傾向にあり過去最多を記録している。２０２４年は、前年比で約３割増の１５１万人を記録した。特に、観光のオフシーズンとされていた冬季にも、多くの外国人観光客が訪れている。２０２５年の桜まつり期間中（４/１～４/１８）には２１万人が訪れた。

「忠霊塔の由来」

富士吉田市遺族会

資源の乏しい日本列島に一億（八千万）の人口を抱えた当時としては、止むに止まれぬ決意と、必勝を信じて昭和十六年十二月八日、日本々土の封じ込め作戦を強行せんとする米英に対して宣戦を布告し、総力を挙げて戦ったものの物量の前に歯が立たず、同二十年八月十五日正午、遂に刀折れ、矢弾尽きて、無条件降伏の余儀なきに至ったこと、返す返すも残念であり、腸の煮え返るようであつたであらうなど、当時が偲ばれてならない。

あれから既に三十余年の歲月は流れた現在、当時の状況を知る私共、誠に今昔の感一入であり、本市に於ても八五〇余柱の尊い犠牲者を出した遺族、禍を転じて福とする、日本人固有の根性は、辞に尽せぬ苦難を乗り越え、先ず先ずの生活の営めることの蔭に、その素地を築いた一団のあることを忘れてはならない。

敗戦混迷の中に命かながな着のみ着の儘引揚げた敗残兵、参戦は免がれたものの、銑後の護りに責任を負

いて、市長自ら奉賛会の名に於て指揮をとり、着々具体化に向かつて前進する。

先ず、建設場所の位置づけは、当初小舟山をと決定し、整地、地鎮祭も済ましたが、地盤（サルボー）軟弱永久的建造物の敷地としては不適格との判定により、現在地に建設することを決め、いよいよ建設工事に着手する段取りとなる。

依って、どのような容姿にかと寄り寄り協議、差し当たつて東京上野の寛永寺、芝増上寺、長野の善光寺、その他各地区の建造物、資料などにより検討の結果、大阪市天王寺の五重塔をモデルとし、その何分の一かで設計（予算壱千万円也）を計上、甲府市の引揚軍人であり、この道の経験者でもある高石工務店を指定、責任を持つて工事の施工に当たれるよう特に念を押して発注する。

起工昭和三十四年四月、竣工昭和三十七年四月、満三ヶ年も日時を費して漸く完成、この間の幹部役員の労苦、尋常でなかつたと当時を追憶して涙ぐむ。

資金面については、当時下吉田町在郷軍人会の所管に係る軍人林の十町歩にある成木を処分して基金とする案を、当時の分会長遠山勇治氏に提示して協力を要請、同氏もとより依存ある筈もなく、現存する歴代分

うた在郷軍人会幹部諸氏、とり返しのかかぬ過去にこだわらず、今日現在の遺族の窮状、坐視するに忍びず、如何なる方法、手段を講じてでも、救護の手を差しのべる為の援護会を結成。

今次対戦の引揚軍人でもある大正寺住職遠山正欽先生を軸とし、奥脇規矩男、宮下茂泰、渡辺儀作、渡辺七明の各氏常任理事としての立場で諸般の実践活動に着手すると同時に、不幸にして逝きて帰らぬ戦友の霊を弔う慰霊塔を建立して、永く永くその功績を称えて永遠不滅のものとしよう救援活動と併行して、企画、設計、与論の喚起など、これが具体化に燃やす情熱、当時を知る市民の異口同音の讃辞である。

援護会の組織化の経過報告と全面的な指導と協力を、時の市長希代圭司氏に要請する。勿論、趣旨に異論ある筈もなく快諾、即刻全市全世帯、各種機関、組織、団体を網羅して、全市民総参加のもと奉賛会を発足させ建設場所、慰霊塔の容姿、資金の捻出、方法等につ

会長渡辺清孝、小林信義、渡辺武造、田辺貞治、渡辺治郎吉各氏と協議、快諾。

早速、富士吉田市外二ヶ村恩賜林組合長大森直光氏に事情を訴え、善処方を懇請する。恩賜林組合として事情篤と諒承、値ごろも度外視してと、当事者の要請に応じ、更に機宜に即した大事業、万難を排して完成するようにと、言葉を尽しての激励に一段と奮起し、この滑り出しのよさに一同気をよくして、勇気百倍、それぞれ手分けして募金に熱中する。

因に篤志（高額）寄付者		一、九五六〇
総額		九、一八六、〇三〇円也
金 額	芳 名	
一金参百万円也	下吉田町在郷軍人会	
一金五拾万円也	富士吉田市外二ヶ村	
	恩賜林組合	
一金五拾万円也	富士急行株式会社	
一金式拾万円也	日露戦役瑞穂分会	
	代表小野せき	
一金式拾万円也	吉祥寺女子高等学校	
一金式拾万円也	富士吉田市福祉協議会	
一金拾式万四千五百三拾円也	富士吉田市遺族会	
一金参万参千円円也	々	

一金拾貳万円也	山梨中央銀行吉田支店
一金拾万円也	旭化成KK
一金八万円也	都留信用組合
一金六万四千七百円也	市消防団
一金五万円也	日本相互銀行吉田支店
一金五万円也	駿河銀行吉田支店
一金五万円也	渡辺東作
一金五万円也	第一証券吉田支店
一金五万円也	渡辺秀雄
一金五万円也	甲商渡辺金男
一金五万円也	吉田歯科医師会
一金五万円也	渡辺忠賢
一金五万円也	浅沼貞治
一金五万円也	堀内欣吾
一金五万円也	河口湖精密KK
一金五万円也	三国屋渡辺五郎
一金五万円也	上嶋治照
一金四万円也	大信吉田支店
一金参万参千円也	富士吉田靖国会
一金参万円也	米山義造
一金参万円也	渡辺俊雄
一金参万円也	小林信義
一金参万円也	小野斧文
一金参万円也	窪田竜一
一金参万円也	渡辺茂
一金参万円也	白須角助

塔の維持管理について

市の奉賛会と遺族会が、それぞれの立場に於いて分担して遺漏なきよう万全を期す。

一、奉賛会は、市内自治会を通じて会費を徴収、福祉事務所（課）を窓口として維持管理の衝に当る。

一、毎年秋の彼岸中日を祭日と定め、各種団体、組織を動員し、全市民参加のもとに、壮厳の裡にも盛大なる慰霊祭を施行する。

一、遺族会は、八月十日前後、各地区役員を動員して、塔の内部、諸施設、位牌、備品等の清掃他、塔周辺、参道等の除草、清掃等に奉仕。

一、春の彼岸、盂蘭盆会、秋の彼岸（慰霊祭）に開帳して、遺族の外一般市民の礼拝者の受付け等に奉仕。

尚一、灯籠は、年々歳々の建替への煩を除けて固定化の結果、必要に応じて点灯、四月の花見時など点灯して慰霊を兼ねて観桜会を催す。

一、平時休灯中破損した部分の補修、灯籠の点滅などにも奉仕

一金参万円也	柏木輝光
一金参万円也	山本KK
一金参万円也	奥脇敏幸
一金参万円也	渡辺瑛治
一金参万円也	堀内弘達
一金参万円也	河野義一
一金式万五千円也	藤野新太郎
一金式万円也	秋山富美
一金式万円也	堀内勝蔵
一金式万円也	渡辺佐忠次
一金式万円也	川上清
一金式万円也	吉郎
一金式万円也	北井正志
一金式万円也	羽田清郎
一金式万円也	吉元勝
一金壹万円也	
一金壹万円也	

渡辺治之外一、八〇五名
一、六四四、六九〇円也

◎当時の世情に鑑み援護会の運営に卒先協力した各地区役員左記の通り。

下吉田地区

東町

渡辺宗一 武藤佑昌 白須元

仲町

渡辺治郎吉 武藤多喜雄 渡辺明 渡辺宗行

西町

萱沼喜義 渡辺喜三

本町

保坂輝夫

新屋

真田佐太郎

泉町

遠山勇治

幸町

小俣庵

曙町

白須啓治 秋山政良

弁天町

白須孝 荒井守治 白須庄寸

緑ヶ丘

三浦武則

竜ヶ丘

白須勝治

旭町

渡辺等 渡辺兼吉

浅間町

渡辺盛之 渡辺省三

新町

渡辺剛 渡辺広衛 渡辺藤治

宮下町

渡辺力一

富士見町

渡辺鬼獅男 渡辺七雄

上吉田

早川孖俊 上村正義

明見

舟久保吉次郎 太田芳衛

あ と が き

憶えば一枚の赤紙に理屈拔きの応召、南に北に悪戦苦斗するも戦況刻々不利を伝へ、異国の山野に戦場の露と消えた幾多の戦友の余りにも惨憺たる最後を知るだけに、遣る瀬ない切なさ胸の張り裂ける思いで引き揚げたものの

戦中戦後の厳しい世相の中を切り抜けて来た遺族、敗戦と云うショックに手も足も出ず、途方に暮れている姿に接したとたん、自らの生還したことが何か後暗いような錯覚をさえ感じた当時が、今は昔の憶い出として強く印象に残るでありましょう。

それにしても、当時の援護会の諸氏、血の滲むような気概に燃えての運動の史実など、何処か奥深く埋蔵されて、その記憶など見当たらず、止むを得ず、当時一線で活躍した実践の諸氏の記憶を頼りに、漸くまとめたものの、而も当時奔走した諸氏の内にも、既に故人となつた数人の先達もあること、何か淋しさを覚えます。

私共遺族としても、現在新倉山中腹に、霊峰富士と相対して鎮座する慰霊塔こそ、時は移り、代は変つてもこの世ある限り、永久に供養を励む基を創始した援護会諸氏の残した何ものにも替え難い積善の功德であります。

西町

倉沢すみ

大明見

宮下富枝 宮下静

尚、塔内に安置する英霊、全市街を一望に収め、雨の日も、風の日も、朝な夕な市民の日常生活の上に、限らない倅を祈念しておるであろうこと。

霊峰富士に抱かれた郷土富士吉田、歳月と共に発展を続けるであろう。

諸霊よ、後顧の憂いなく安らかに眠れよかしと願いを込めて合掌してご冥福を祈る。

追 伸

これを編集するに当り、御指導、御協力戴きました、犬飼俊英富士吉田図書館長に心から感謝申し上げます。

英霊はもとより、私共遺族一同、今更改めて深甚の敬意と心底より感謝の誠を捧げてお礼の辞といたす次第。

それにしても援護会の第一線でご活躍下さった諸氏、新規の事業だけに並々でなかったご苦勞が、斯うした作文する中にも滲み出て頭の下る思い。

当時私共全然の門外漢であり、何一つお手伝いも出来ず、随つて其の状況など知る由もなく、今回の作文も、当時の事共既に忘れかけた皆様の追憶を頼りに、寄せ木細工であり、積木のようなもの。

だから勿論完全なものなど思つてもいない。当時ご苦勞下さった皆様方のお目通しを願つて、お氣付の点などご指摘戴き、より完璧なものとして伝承出来ますれば幸甚の至り。

尚、当時大正寺を本部として、夜を日について奔走なさつた諸氏へのお茶番、隣近所への使い走りなど、何くれとなく奉仕した婦人部の皆さんの芳名を記して、その勞に報いたい。

浅間町

渡辺晴枝 渡辺あさ子 渡辺きみ子

仲町

渡辺峰子 佐藤うめ

昭和五十三年九月二十三日

富士吉田市遺族会

戦後八十年 平和への願い ——「忠霊塔の由来」再発行への願い——

編著者・大正寺 住職 遠山正真

昭和五十三年に富士吉田市遺族会の手により『忠霊塔の由来』が世に出されました。それから四十有余年、時代は大きく移り変わりました。かつて静かな追悼の地であった新倉山は、今や年間一五〇万人もの来訪者を迎える世界的な観光地となっています。当時の人々が想像もしえなかった現状を前に、私たちは改めて忠霊塔に込められた意味と向き合う必要があると感じています。戦後八十年の節目を迎える本年、改めて、あの戦争の時代に生き、命を落とされた人々の歩みと、そこに込められた願いに思いを馳せるべき時にあり、再び「忠霊塔の歩み」（平和への願い）と改題し発行する運びとなりました。

新倉山の中腹に佇む忠霊塔——正式には「富士吉田市戦没者慰霊塔」——は、一九六二年（昭和三十七年）に、明治以降の戦争において命を落とされた郷土出身の戦没者一千余柱の戦没者を追悼するために建立されました。鉄筋コンクリート製の五重塔は、古来より仏教的な象徴として尊ばれてきた建築様式を取り入れながら、戦後の新しい時代における追悼のかたちを具現

数ですが、それぞれの心に平和への願いと、亡き家族への想い、郷土の歩みを問い直す時間を持ちに來られる方も少なからずおられます。

かつて、忠霊塔のふもとに立てば、そこには観光地にありがちな華やかさとは異なる、静謐で厳かな空気が流れておりました。今では世界中に認知され、多くの観光客が訪れる賑やかな様相となりましたが、単なる絶景スポットではなく、命の重みを感じ、未来の平和を願う場所として存在していることに、私たちは深い意味を見出すべきです。

戦後八十年という年月は、長いようでありながらも記憶が風化してしまうには決して長すぎる時間ではありません。年々、戦争を直接知る世代の声は小さくなり、戦争を経験していない世代が人口のほとんどを占めるようになった今日、戦争がもたらした痛苦の記憶は遠いものとなりつつあります。

静かにたたずむ忠霊塔は、言葉を持たずとも私たちの内に問いを投げかけます。「今の暮らしの中で、何を受け継ぎ、どう未来へ繋いでいくのか」その問いかけに、私たちは真摯に向き合わねばなりません。

私たちは、忠霊塔が建立された意味と、その背後にある無数の物語を、再び記録し、伝える責任があります。戦後八十年というこの節目にあたり、忠霊塔の建立の経緯、そこに込められた想い、そして今日まで守り続けてきた地域の歩みを、再び冊子というかたちで広く伝えることに意義を感じ、本書の再発行に至りま

化したものであります。

この塔が建てられた背景には、単に過去を悼むだけでなく、二度と同じ悲劇を繰り返すまいという、地域の人々の強い決意と未来への願いがありました。当初大正寺の目の前にあった小舟山に建立が予定されていた慰霊塔は、地盤の問題により現在の地である新倉山中腹に建立されました。そこからは、雄大な富士の姿を正面に臨むことができます。五重塔の正面にそびえる富士山の姿は、まさに「永遠」「清浄」「平和」の象徴として、この追悼の場を見守っています。

建立当時、まだ戦後の記憶が生々しく残る中で、忠霊塔は単なる戦争遺構としてではなく、「戦没者を悼み、平和を願う場」として建立されました。その想いは、地元の人々によつて大切に守られ、また次世代へとその意味を伝えていく努力が重ねられてきたからに他なりません。

春には桜、秋には紅葉、そして澄んだ冬空の中に富士が浮かぶ季節——現在この地を訪れる人々は、ただ富士山と五重塔との景観を求めている観光客の方が大多

した。

この冊子が単なる記録や資料としてではなく、一人ひとりの心に静かに語りかける「平和への願いの書」となり、未来を担う世代に向けた平和のバトンとなることを願ってやみません。

忠霊塔のふもとから見上げる富士の姿は、今日も変わらずそこにあります。その中で、ただ「戦争は悲惨であった」という表層的な記憶ではなく、一人ひとりの命に寄り添い、そこにあった苦しみ、悔い、そして平和への願いを受け継いでゆく責任があります。この場所を訪れるすべての人が、手を合わせ、静かに目を閉じるとき、その心に届くものがありますように。そして、私たち一人ひとりの中に、平和を築く願いが育まれますように。この冊子が読者にとって、いのちと向き合うためのひとつの手がかりとなりますよう念願いたします。

併せて巻末には、昭和五十三年に発行された「忠霊塔の由来」を掲載致します。過去の記録を現在に照らし合わせながら、この忠霊塔が語る声に、耳を傾けていただければ幸いです。

最後に本制作にご尽力いただきました、富士吉田市職員の方々、関係各位に感謝申し上げます。

令和七（二〇二五）年八月



忠霊塔の歩み 平和への願い

二〇二五（令和七）年八月発行

発行者 富士吉田市遺族会

編著者 遠山正真（大正寺住職）

資料提供 富士吉田市遺族会

写真提供 富士吉田市教育委員会歴史文化課

浄土真宗本願寺派 大正寺

監修 富士吉田市

協賛 遠山正尊（大正寺前住職）

協賛 富士吉田市外ニヶ村恩賜県有財産保護組合

浄土真宗本願寺派 大正寺

協力 富士吉田市

忠霊塔の概要

1 正式名称 富士吉田市戦没者慰霊塔（通称：忠霊塔）

2 所在地 富士吉田市新倉3360番地の1
市立新倉山浅間公園内

3 構造等

①鋼板一文字葺鉄筋コンクリート五層建 大阪四天王寺の五重塔を模している。

②大きさ 基礎部分7.3m四方 一階床面積四坪（13㎡）

③高さ 19.5m（本体部分13m、相輪6.5m）

④総工費 9,368,884円

（工事費9,210,767円 事務費158,117円）

忠霊塔建立の経緯

富士吉田市戦没者慰霊塔（通称：忠霊塔）は、明治（1868年）以降の日本国として参戦した戦役（日清、日露、第一次世界大戦及び太平洋戦争）において戦没した市内出身者960余柱（現在1055柱）を合祀するため、市の援護会が中心となり、昭和33年8月12日に富士吉田市長を委員長とする富士吉田市慰霊塔建設委員会が設けられた。委員会は、その建設資金を旧下吉田町在郷軍人林を恩賜林組合に売却した300万円を基礎資金として、その他不足する部分を広く市民の浄財に寄り、昭和34年4月起工し3年間の工事期間を経て昭和37年4月に完成し現在に至る。

富士吉田市慰霊塔奉賛会
富士吉田市遺族会



工事中の忠霊塔（昭和三十四年）